BULLETIN

Volume XVII Number I March 2021

Japan Society of

Gene and Cell Therapy

JSGCT

～ 浅野茂隆先生・追悼号 ～

〔巻頭言〕

浅野茂隆先生を偲ぶ

巨星、墜つ・・・。浅野茂隆先生の訃報に触れた時、最初に思い浮かべた言葉でした。

1996年、日本遺伝子治療学会学術集会（第2回）に初めて参加した際、安田講堂脇で缶コーヒーを飲んで休憩していた若造の私に、「先生は、どこの大学？」と気さくにお声がけ頂いたのが、浅野先生との出会いでした。それ以後、学会休憩中の雑談と、懇親会後の二次会（時に、ホテルの先生のお部屋での3次会も）で先生と大いに語らう時間が、学会へ行く大きな楽しみの一つになりました。G-CSFの発見～製剤開発の苦労話から、遺伝子治療と学会への熱い想いなど、一つ一つのお話しが、忘れられない思い出です。

東大を定年退任されて数年後、あるご相談で早稲田の研究室にお邪魔したことがありました。「先生、ごめん、ちょっと待ってて」とソファに掛けて小一時間ほどお待ちしている間、先生は3名の学生さんの修士論文の修正ポイントについて、赤ペンを入れながら懇切丁寧かつ熱心に指導していらっしゃいました。学会場では見られない教育者としての浅野先生に、その時初めて触れた訳です。短気な私より、もっとずっと短気だと思っていたのに・・・（笑）。

浅野先生は初代理事長として本学会の創設から発展に極めて大きなご貢献をなさり、愛して止まないこの学会の法人化のメドが立った2020年の暑い夏の最中、8月12日に旅立たれました。奇しくも、この年は私が会長を仰せつかった第26回学術集会が、コロナ禍のために中止を余儀なくされた年でもあります。2019年12月、浜松町の喫茶店で偶然お会いした時に、「来年の学術集会は、博多へ行くのを楽しみにしてるよ！」とおっしゃって別れたのに・・・。それは私にとって、叶わぬ最後のお言葉になってしまいました。

本追悼号では、歴代会長の先生方に、浅野茂隆先生との思い出を綴って頂きました。浅野先生のご功績だけでなく、暖かくて人懐っこいお人柄が思い出され、まさにその場面がリアルに目に浮かぶようなご寄稿ばかりです。どうか大切にお読み頂ければと思います。

日本の遺伝子治療もいよいよ花開く時、浅野先生、どうか暖かく見守ってください。

合掌

日本遺伝子細胞治療学会理事・教育広報委員会委員長
九州大学大学院薬学研究院・教授
米満　吉和

浅野茂隆先生 御略歴

主な受賞歴

1990年　ベルツ賞
1993年　日経BP技術賞
2004年　科学技術文部大臣賞
2012年　大隈記念学術褒章
2017年　瑞宝小綬章

学歴

1961年　山口県立宇部高等学校卒業
1968年　東京大学医学部医学科卒業
1978年　医学博士（東京大学）

職歴

1968年　医師免許証取得、国立東京第一病院（現国立国際医療研究センター病院）内科・医員
1970年　東京大学医学部第三内科・医員
1971年　東京医科歯科大学医学部第二生化学教室・研究生
1974年　自治医科大学造血発生研究部 助手
1978年　The Walter & Eliza Hall Institute（メルボルン大学）客員研究員
1980年　東京大学医科学研究所附属病院・内科診療科・講師
1985年　東京大学医科学研究所病態薬理学研究部・助教授
1990年　東京大学医科学研究所・教授（先端医療研究センター分子療法分野）
1992年　東京大学医学部第四内科・教授（併任、～1994年）
1994年　東京大学医科学研究所附属病院・病院長（～2004年）
2000年　東京大学医科学研究所・先端医療研究センター長（兼任、～2003年）
2004年　東京大学名誉教授、早稲田大学先進理工学部・特任教授
2006年　北京大学医学部・名誉教授
2008年　早稲田大学総合研究所胎生期エピジェネティック制御研究所・所長（～2011年）
　　神戸大学大学院医学研究科・客員教授（併任）
2009年　早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構・機構長（併任）
2011年　早稲田大学重点領域研究機構・東日本復興拠点先端環境医工科学研究所・所長（併任）
2020年　8月12日　ご逝去

主な所属学会

日本血液学会（名誉会員、認定医・指導医）
日本癌学会（名誉会員）
日本内科学会（功労会員）
日本遺伝子治療学会（現日本遺伝子細胞治療学会、初代理事長）
アジア血液学連合（AHA）代表

浅野茂隆教授を偲んで

公益社団法人 地域医療振興協会 会長
第1回 JSGT学術集会会長　髙久 史麿

私と浅野教授との関係は、彼（あえて彼と言わせていただく）が1968年4月に東京大学医学部に入学されてから2020年8月に亡くなられるまでの52年間にわたっている。まさしく長い間の友人であった。

彼は1968年から1970年まで2年間、国立東京第一病院（現・国立国際医療研究センター）で初期研修を受けられているが、国立東京第一病院は私が1990年に院長に就任（当時の名称は国立病院医療センター）した病院であった。その後1993年からはナショナルセンターになり名称も国立国際医療研究センターと変わり、私は1996年まで総長として勤務していたところであった。

また、彼は1973年に東京大学第3内科の医員になっておられるが、その第3内科も私が1982年から2000年にかけて教授を務めた内科である。また彼は1974年から1975年まで自治医科大学造血発生部門（三浦恭定教授）で助手を務められている。当時、私は自治医科大学内科（血液学）の教授であった。彼は、その後1978年から1980年にオーストラリアのメルボルンに骨髄移植の勉強のため留学され、帰国後東京大学の医科学研究所（医科研）の講師になられ、助教授、教授、病院長になられている。

医科研でも私は彼と縁があり、1988年に東京大学医学部長になった際、医科研の内科教授を併任することを当時の東大医科研所長の豊島久眞男氏に頼まれ、2年間ほど週1回くらいの頻度で医科研に通ったことを記憶している。仕事は主に医科研の内科に入院しておられる患者さんの回診であったが、回診の前に医科研のテニスコートで若い頃の谷憲三朗氏（現在、医科研のALA先端医療学社会連携研究部門 特任教授）と毎週テニスを行って、その後に回診していた記憶がある。

私が2000年3月に東京大学医学部長・医科研教授を辞任した後に浅野氏が教授、さらに病院長になられ骨髄移植、さらに遺伝子治療の分野に医科研内科の研究、診療の内容を広げ、医科研の研究、診療分野での評価を大いに高めたことは周知の通りである。

遺伝子治療の分野では、現在、藤堂具紀東京大学医科学研究所 先端医療研究センター教授が脳腫瘍で世界的に研究・臨床で有名になられているのも、浅野氏の病院長当時のご尽力の結果と言えるであろう。

遺伝子治療に関しては、私は浅野氏の勧めで第1回日本遺伝子細胞治療学会の会長を引き受けている。その内容については記憶していないが、数年前、久しぶりに日本遺伝子細胞治療学会に出席したところ、発表者が全員英語で発表されているのに驚いた。その時に事務の人に聞いたところ、第1回の会合（すなわち私が会長）の時からこの学会は全員英語発表であったとのことである。おそらく浅野氏のアイディアであったに違いない。

また、この追悼文のご依頼の際に送られてきた浅野氏のご略歴を拝見したところ、海外のいくつかの大学の教授を兼任されており、それだけ彼は日本の先端医学の国際的発展にご尽力されたと言えよう。

個人的な話であるが、私は浅野氏のご結婚に際して仲人を務めている。彼は当時金沢大学医学部の村上元孝教授のお嬢様と結婚されたのであるが、仲人として金沢駅を降りた際、タクシーにただ一言「金沢大学の村上教授のお宅」と言ったところ、直ちに連れて行ってもらったことには驚いた。村上先生は金沢大学をご退任後、東京都養育院附属病院（現・東京都健康長寿医療センター）の病院長を務められた、世界的に高名な先生であった。ただ、肝心の浅野氏の結婚式についてはあまり記憶にない。おそらく私の高齢化のためであろう。

近年、浅野氏、平嶋邦猛氏（元・埼玉医科大学教授）など以前から親しかった人たちが相次いで亡くなられた。残念な限りである。

浅野茂隆先生の想い出

自治医大名誉教授
女子栄養大学副学長
第6回 JSGT学術集会会長　香川 靖雄

私が浅野先生に最後にお会いしたのは写真の令和元年の日本遺伝子細胞治療学会の歴代会頭・懇談会で、白髪で恰幅の良い先生が「やあ」と何時もの磊落な態度で私の隣に座った時です。先生は情熱的に今後の学会の在り方を討議されました。私は中国栄養学会開会式に招待を受けていて、前年末に中国でCRISPR-Cas9を使用したゲノム編集技術をヒト受精卵に応用した実験等の問題が多いけれども、全体として遺伝子治療の論文数と質が日本より高い事に注意を促しました。先生は私より11年後輩の鉄門出身で、名医 沖中重雄教授の伝統ある東大第三内科に入局されました。同内科血液グループからオーストラリア留学の後に、1980年から東京大学医科研の講師、助教授を経て1990年に研究所先端医療研究センター分子療法分野教授に就任されました。血液グループの先輩の高久史麿東大医学部長にお会いし偶々、浅野教授の話になり「威張っているでしょう」と言われましたが、私の同級の大人しい同グループの三浦恭定教授は浅野先生を避けていたようです。私は活力あふれる浅野先生に特にお世話になったのが2000年7月27-29日に私が第6回遺伝子治療学会会頭として、笹川会館で学会を開催し、特に29日は国際会議として多数の著名な欧米の研究者に講演をして頂いた時でした。その時、学会運営の中核となったのが医科研の浅野先生の研究室だったのです。先生の教室からは実に6演題を講演され、私はGene Therapy 4, 6-10, 1997に発表して以来のミトコンドリア遺伝子疾患の卵子に若年卵子の健常ミトコンドリア移入で治療する技術を講演しました。同29日の夕方には海外の参加者を品川から船清の屋形船に招待して東京湾の夜景を楽しみました。先生は1994年には医科研付属病院長も勤められました。もともと私は学生時代から医科研の前身の伝染病研究所の組織培養室で実験し、卒後も1960年代の末の一時期は医科研化学部の上代淑人教授の下で助手でした。上代先生のところに有名な長田重一先生が助手としてG-CSF遺伝子のクローニングを浅野先生と一緒にされたのも懐かしい想い出です。医科研との交流は私が自治医大教授になっても例年の講演会などを通して浅野先生とはお付き合いさせて頂きました。医科研の名誉教授となられて後も早稲田大学理工学術院特任教授で遺伝子細胞治療学会のために精力的に活動して下さいました。私は日本初の遺伝子治療が1995年にADA欠損症に対して行われた時の文部科学省の遺伝子治療審査委員でしたが、今はその患者様が社会人として活動しておられることに本学会の役割の大きさを体感しています。先生の長年の遺伝子治療学会への御貢献に深謝し、心からご冥福をお祈りします。

日本遺伝子細胞治療学会(JSGCT)　歴代会頭・懇談会
日時：令和元年 7月22日(月) 12：00 ～12：50
場所：山上会館　001会議室　(B1)
〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3－1
出席者
歴代会頭(名誉会員)
香川　靖雄先生　(第6回JSGT 2000)
浅野　茂隆先生　(第9回 JSGT 2003)
衛藤　義勝先生　(第11回JSGT 2005)
島田　隆先生　(第12回JSGT 2006)
吉田　純先生　(第13回JSGT 2007)
小澤　敬也先生　(第16回JSGT 2010)

浅野茂隆先生と日本遺伝子細胞治療学会

財団法人脳神経疾患研究所先端医療研究センター長
東京慈恵会医科大学名誉教授
第11回 JSGT学術集会会長　衛藤 義勝

浅野茂隆先生が昨年8月12日にご逝去され、78歳の人生を閉じられたこと、大変残念であります。先生とは日本遺伝子細胞治療学会を1994年、27年前に一緒に立ち上げ、その当時のことが今でも鮮明に思い浮かびます。先生は持前の精力的で且つ情熱的な人を引き付ける話し方、タバコが大好きで、大変人なつこいお人柄、浅野先生には大変引き付けられました。

さて日本遺伝子細胞治療学会がどのような過程で設立されたか、そのきつかけは、1990年にFrench Anderson教授がNIHで先天性免疫不全症の遺伝子治療の成功を報告し、遺伝病が治療可能であるという

ことを初めて証明し、大変大きな衝撃を受けたことから始まります。この発見を契機に遺伝子治療に対して多くの研究者は、当時大変大きな刺激を受け、1994年大野典也教授（前慈恵医大細菌学教授）と私は第1回遺伝子治療研究会を発足させ、そのワークショップを5月11-12日にハーバード大学のDanald Kufe教授を初め米国の著名な学者を招聘してヤクルトホールで開催し、大変な熱気の中500名近い参加者を得て大変成功裏に開催出来ました。この遺伝子治療研究会のワークショップの成功がきつかけで、その後全国組織にしようという機運が出来、この会に参加されていた浅野茂隆先生と話し合い、日本遺伝子治療学会の発足に繋がりました。当時本学会設立には皆さん大変なエネルギーを感じ、浅野先生が事務局代表幹事で、私が事務局副代表幹事となり、日本遺伝子治療学会が1994年に発足しました。第1回の日本遺伝子治療学会は日本医学会会長の高久史麿先生を会長としてお迎えし、1995年5月21日に東京大学安田講堂で開催され、当時マスコミの方々も多数来られて、大変な熱気でした。浅野先生は持前のタフな采配力で、450名以上の参加者を得て、大変素晴らしい第1回日本遺伝子治療学会が開催出来ました。その後は浅野先生の指導力で日本遺伝子治療学会も順調に発展し、浅野先生が理事長となり、2009年に大阪大学の金田安史教授が理事長に選出され、2015年日本遺伝子細胞治療学会と名称変更、2018年には現在の藤堂具紀教授にバトンタッチされました。この間私は約30年間に渡り日本遺伝子細胞治療学会を通じて、浅野先生と深くお付き合いをさせて頂きました。先生は何時も世界を見つめ、日本の在り方を多くの後輩に指導され、並外れた人間力の大きさを示して来られました。コロナの為に面会出来ないため、亡くなられる1か月前に医科研の病室に電話でお話したのが最後となりました。日本血液学会を初め、多くのわが国の医学会の要職を務め、日本の医学会のリーダーとして、大変異才な逸材であり、わが国の医学会にとつても、先生を失なつたことは非常に残念であります。浅野先生のご逝去にあたり、先生のように将来を見据えた先見性とリーダーシツプを持ち、国際性のある人材がこの日本で育ち、輩出することを先生のご逝去にあたり強く望みます。

浅野茂隆先生のあの逞しい生き方は日本遺伝子細胞治療学会の後輩の先生方の心に強く残されたと祈念致しております。

写真は約20年前の在りし日の浅野茂隆先生、私、大野典也先生（故人）との談笑風景です。懐かしいですね。

在りし日の浅野茂隆先生
1998年8月28日　市ヶ谷グランドホテルにて

左より小生、大野先生、浅野先生、外人、Mochiski先生、北川先生

浅野先生、小生、大野先生

浅野茂隆先生の心からのご冥福をお祈りいたします。

2021年2月末日

浅野茂隆先生と日本の遺伝子治療

日本医科大学
第12回 JSGT学術集会会長　島田　隆

浅野茂隆先生に初めて会ったのは1991年の暮れ、私がNIHから帰国して直ぐの頃だった。医科研のセミナーに呼んでもらい、小澤敬也、中内啓光、谷憲三郎らと教授室で話し込んだ。その後、近くのレストランで食事したが、さすがに白金はしゃれていると感心したのを覚えている。未だ研究者の間でも遺伝子治療が理解されていなかった時代である。あれから30年、この間、浅野先生は日本の遺伝子治療の発展のために尽力してきた。特に1995年の遺伝子治療学会の立ち上げは、浅野先生の大きな功績だった。あの時代を知る者として、日本の遺伝子治療の黎明期について紹介したい。

1990年に米国NIHでADA欠損症の遺伝子治療が開始されたが、日本ではあまり大きなニュースにならなかった。ところが1992年に北海道大学でADA欠損症の患者がみつかったことで日本でも遺伝子治療への取り組みが急務になった。臨床研究のガイドラインが必要だということになり私と小澤が作成したドラフトを元に厚生省の指針と文部省のガイドラインが告示された（縦割り行政のため同じ内容のガイドラインが二つ作られた）。又、厚生省、文部省、中央薬事審議会にそれぞれ審査委員会が作られ、遺伝子治療の専門家として浅野、小澤、濱田洋文、中西真人、島田が参加した。

学会でも遺伝子治療の話題が取り上げられるようになった。1993年には浅野先生がプログラムを担当した医科研主催の遺伝子治療セミナー（都ホテル）、名古屋大学主催の国際がんシンポジウム（名古屋）が相次いで開催された。この時にBlaese, Brenner, Friedmann, Samulski, Morgan, Bordignonなど最前線の遺伝子治療研究者を招聘している。

1994年5月に慈恵医大が遺伝子治療研究会を東京のヤクルトホールで開催したことが契機になり日本遺伝子治療学会の設立が議論されるようになった。医科研と慈恵医大の間で一時主導権争いがあったが、結局学会事務局は医科研、ニュースレター事務局は慈恵医大に置くことでスタートした。準備委員会では、これまでの慣習に囚われない、金のかからない、若い医学者を中心にした未来志向型の新しい学会にしようと、毎回遅くまで医科研の会議室で議論が行われた。学術集会については当時としては未だ珍しい、抄録集も英語、口頭発表も英語で行うことが決められた。第一回の日本遺伝子治療学会（JSGT）学術集会は高久史麿先生を会長に1995年5月に東大安田講堂で開催された。この年の8月に日本で最初の遺伝子治療が北大で行われた。

大きな期待とともに開始された遺伝子治療だったが、その後、副作用が次々に明らかになり低迷期を迎えてしまう。学会活動も当初の熱気が冷めてしまい、会員数、参加者数とも減少していった。学会発足時から続く幹事会による学会運営に対する不満も出てきたことから、2005年にJSGT改革委員会（島田、小澤、谷、金田安史）を立ち上げた。2006年には学会の透明性、公平性を高めるために、評議員を母体とする選挙制度を導入し、定年制、任期制を適用した理事会による学会運営に移行する制度改革を行った。この過程で、浅野先生と私は議論がかみ合わず、激論になることが度々あった（中野さんには心配をかけました）。それでも2007年には浅野理事長、衛藤義勝、島田副理事長の体制が正式にスタートした。

その後、金田新体制に変わってからは学会活動から離れてしまったが、それまでの浅野先生との十数年間は私にとっては貴重な経験だった。日本の医学界の閉鎖性、学閥と学会の複雑な関係など、私にとって初めて知ることが多かった。医科研の会議室で決めた学会構想が具現化し、大変だった低迷期を経て今に至ることができたのは浅野先生の遺伝子治療に対する強い思いと、指導力によるものである。特に、学会発足前夜に浅野先生を中心に繰り返された熱い議論は今でも忘れられない。

最近は、浅野先生と直接会うことは無くなっていたが、最近の世界の遺伝子治療の隆盛や、日本の学会の動向をどのように見ているのか一度話し合いたいと思っていた所に、突然の訃報を聞いた。もし話し合うことができれば、未だに欧米に追い付けない日本の遺伝子治療について、研究者、学会、行政、企業への叱咤激励が必要だということで意見が一致したはずである。それができず残念です。

ご冥福をお祈りします。

浅野茂隆先生との思い出

大阪大学 理事・副学長
日本遺伝子細胞治療学会 名誉理事長
第15回 JSGT学術集会会長　金田 安史

浅野茂隆先生は2020年8月12日に逝去されました。体調に関してご本人からもお聞きしており覚悟はしていましたが、あらためて、“巨星墜つ“と感じてしまいました。

ご存じの通り、浅野先生はG-CSFの発見から好中球減少症の治療のための創薬までを導かれたトランスレーショナルリサーチの草分けです。cDNAクローニングは長田重一先生のお仕事ですが、長田先生に声掛けされたのは浅野先生なので、適任者を探し出す嗅覚も尋常ではなかったということです。トランスレーショナルリサーチという表現は2010年以降のわが国ではもてはやされ今は定着したと思いますが、浅野先生はそんな言葉でご自身の研究を表現されるのも好まれなかったのではないかと思います。研究の中で発見した現象から、その謎を解くために、その現象の鍵を握る物質を見出し、その機能を人で検証しなければ科学者ではない、当たり前のことをしただけ、と言われるような気がします。

私が初めて浅野先生にお会いしたのは、1994年だったと思いますが、浅野先生が代表を務められる科研費の重点領域の班員として認めていただき、東大医科研の2階の会議室でHVJ-liposomeの発表を行った時でした。質問が山のように来て、会議がすごく延長したことを思い出します。それ以来、浅野先生は日本における遺伝子治療の推進者として1994年に日本遺伝子治療学会を設立され、一方、私は多くの共同研究者のおかげで遺伝子治療の研究を本格化したこともあり、25年以上にわたって日本の遺伝子治療を発展させる同志としてお付き合いさせていただきました。浅野先生は初代理事長として1995年に東大安田講堂において記念的な第1回総会を開催され、2009年まで学会を牽引されました。その後私が2代目として9年間学会理事長を務めさせていただきました。私は学会の活動も最小限にして自分の研究時間を確保したいと思っていましたので、そのような役職に就こうとも就きたいとも思っていませんでした。ところが2008年の横浜での日本癌学会学術総会の時に、浅野先生から1時間以上もかけて説得され、理事長候補者として立つ決意をいたしました。私は浅野先生と共同研究をしたこともなく東大にいたこともなく、遺伝子治療学会理事として学会時にお目にかかる程度でしたし関東には多くの遺伝子治療研究者がおられるのに、どうして私に、という思いでしたが、“日本に欠けている研究成果の社会実装（この場合は遺伝子治療創薬）を目指すためにはあなたの力が必要”、というのが趣旨だったと記憶しています。研究成果の社会実装の必要性に対する私の強い思いは当時も今も変わらず、むしろ年々強くなっておりますし、今では社会実装後の課題を再び研究に、というエコシステムを提唱していますので、その思いを熱く受け止めさせていただいたからというのが正直なところです。おこがましくも浅野先生を同志と呼ばせていただくのはそのためです。

2009年に大阪で私が会頭として第15回日本遺伝子治療学術集会を開催させていただき、その後理事や学会員の方々に支えられ9年間理事長職を全うさせていただきました。2015年には学会名称を日本遺伝子細胞治療学会に変更いたしました。これには浅野先生は反対でしたが、今後の学会の発展のためには必要です、ということで私の考えを押し通しました。私は従順に人に従うことはしてこなかった人間ですので、浅野先生とはいつも議論し、私の見解も披露して、必ずしも浅野先生の思いのようにならなかった案件もありますし、私の考えを改め高めることのできた案件もございました。いつも先生は理解をしてくださって、変わらず接していただきました。議論が決裂したことは一度もありません。その寛恕さには頭が下がる思いです。

浅野先生は、現状には満足されずいつも問題意識をもって、その解決のために行動された方です。その行動も自分の周りだけをなびかせるというような小さいものではなく、日本を、世界を、動かす、というようなスケールの大きなものでした。問題意識を持つ人は大勢おられますが、国を動かすまで行動し続ける人はおられないでしょう。浅野先生はご自身の提案を役人が理解しないと怒っておられたことも多々ありました。先生は10年以上先を見ておられるので、なかなか理解してもらえないのでしょう、と申し上げたこともあります。しかし今思い返せば、浅野先生が10年遅くお生まれになっていたとしても、おそらく同じように現状には満足せず、目指す内容は違っていても先を見据えて積極的な変革を求めておられたであろうと思います。浅野先生はそういう偉人であられました。

最後に、普通なら、ご冥福をお祈りし安らかにお眠り

ください、と言うべきところですが、浅野先生には、これからもご活躍ください、という言葉こそふさわしいと信じております。

浅野茂隆先生と日本遺伝子治療学会

自治医科大学
第16回 JSGT学術集会会長　小澤 敬也

浅野茂隆先生は昨年（2020年）8月12日に77歳で逝去されました。東大医科学研究所を退任されてからも、早稲田大学や神戸大学などで精力的に活躍されていました。今回のご病気で闘病生活に入られるまでは、浅野先生は現役の頃と同様に情熱的に持論を展開されていましたので、本当に残念でなりません。日本遺伝子細胞治療学会（JSGCT）にとっても、創設者を失い、大きな穴が空いたような感じです。

私は米国NIH留学から1987年に帰国後、1994年に自治医大に異動するまでの7年間、東大医科研で浅野先生のご指導を受けました。丁度、浅野先生がG-CSFを使った様々な臨床開発や初期段階の骨髄移植などに陣頭指揮で取り組まれていた頃で、東大医科研病院が活気に満ちていた時代に貴重な体験をさせていただきました。2014年4月から2018年3月までは、私は病院長として東大医科研病院で再び働くことになりましたが、既に退任されていた浅野先生が時々病院長室に突然姿をお見せになり、熱弁を振るっていかれたのは、つい先日のように思い出されます。

この追悼文はJSGCTのニュースレター特集号の載せていただくものですので、日本遺伝子治療学会JSGT（最初は“細胞”は入っていませんでした）に関係したことを少し取り上げてみたいと思います。学会立ち上げの時の詳細は、衛藤義勝先生が触れられるかと思いますので、ここでは省きたいと思います。浅野先生が中心となって、1994年にJSGTが設立され、翌1995年に第1回JSGT学術総会（会長：高久史麿先生）が東大安田講堂で開催されました。しばらくはこの安田講堂で、手作りのような形で開催されていたことは懐かしい思い出です。生まれたばかりの学会の運営は浅野先生のリーダーシップが大いに発揮されました。JSGTの最初のJは、Japanの頭文字で、Japaneseではありません。Japanを使った方が格調が高いという話を浅野先生がどこからか仕入れてきたためでした。

私がJSGTの学会長を務めましたのは2010年で、第16回JSGT学術集会を栃木県宇都宮市で開催しました。この時の会長講演の司会を浅野先生にお願いしていたのですが、直前になって浅野先生から電話がかかってきて、入院しているから学術集会に参加できなくなったというご連絡でした。重症感染症でしたが、浅野先生は“医者にはかからない”というのがモットーでしたから、高熱が出てもご自宅で気合いで治そうとされていたようです。たまたま骨髄移植を受けた患者さんの会が年1回あり、大変なご様子で医科研に現れたようです。驚いた医科研のお弟子さん達が無理矢理浅野先生の検査を行って、ある大学病院に緊急入院となったようです。この時は、患者会がなければ危なかったでしょうから、“患者さんに助けてもらった”と後日、言われていました。

JSGT関係ではありませんが、日本血液学会の統合も浅野先生ならではの偉業です。以前は、日本血液学会と日本臨床血液学会があり、年に2回、同じような学術集会があって大変でした。そこで、浅野先生が豪腕でこの二つの学会を統合して日本血液学会として一本化されました。通常は増えていく学会を一つにまとめるのは大変なことですが、浅野先生の圧倒的なパワーがあって可能になったものと思われます。浅野先生の大きな仕事はいろいろありますが、やはりG-CSF関係が一番であり、特にその臨床応用に向けた取り組みは当時、世界をリードしていたと思います。浅野先生は幾つかの大きな賞を授与されていますが、その一つが第7回JCA-CHAAO賞（2017年）です。受賞理由は「バイオ医薬品Lenograstim（遺伝子組換え型ヒト天然型G-CSF）の開発研究・臨床展開によるがん・白血病治療成績の向上」でした。写真は授賞式の時のものです。

浅野茂隆先生の大きなご功績に敬意を表し、ご冥福をお祈り致します。

浅野茂隆先生の思い出

東京大学定量生命科学研究所
第17回 JSGT学術集会会長　谷 憲三朗

「浅野茂隆先生のご逝去を悼み、心からご冥福をお祈り申し上げます」

JSGCTニュースレターへの初寄稿がこのような文になるとは全く思っておりませんでした。重ね重ね悲しく、残念でなりません。

浅野先生には私が東京大学医科学研究所・病態薬理学研究部・三輪史朗先生の大学院生として東京大学に入学いたしました1980年の9月に初めてお目にかかりました。当時先生はオーストラリア・メルボルンのWEHIよりご帰国されたばかりで、1ポンドのステーキが大好きなバイタリティーの塊という強い印象を持ちました。その頃から先生は、これからは「骨髄移植だ！」「遺伝子治療だ！」といろいろなところで叫んでおられました。そして1982年より浅野先生のご指導の下、東京大学医科学研究所（医科研）附属病院で骨髄移植が開始されました。私は1984年に遺伝子クローニングおよび解析技術を学び米国留学から帰国し、より一層浅野先生のご薫陶を受けることとなりました。当時三輪教授が進めてこられたピルビン酸キナーゼ（PK）欠損による先天性溶血性貧血の原因遺伝子であるヒトPKcDNAを世界に先駆けてクローニングできたことから、PKcDNA発現レトロウイルスベクターを用いた遺伝子治療の基礎研究を始めました。本成果はマウスでの結果を発表させていただくと共に、臨床研究ができないかと随分考え悩みましたが、当時の日本においてはまだまだ可能性はほぼゼロであると判断され、浅野先生のご指導のもとGM-CSF遺伝子導入腎癌細胞を用いた免疫遺伝子治療臨床試験を当時医科研病院で実施させて頂くことになりました。紆余曲折の後、当時医科研病院には臍帯血バンク設立のための臨床細胞工学室建設の計画があったことに相乗りする形で、レトロウイルスベクター使用可能な陰圧無菌細胞処理室（現医科研病院細胞リソースセンター（旧臨床細胞工学室））を設置して頂き、1998年より遺伝子治療臨床試験が第4期腎癌患者を対象として無事に開始でき、GM-CSF遺伝子導入腎癌細胞接種の安全性を確認するとともに最長8.5年の長期生存例を得ることができました。日本遺伝子治療学会（JSGT）はこの頃、浅野先生と慈恵会医科大学・衛藤義勝先生が東奔西走され、不肖私も足軽として参画させて頂き、1994年に学会として産声を上げました。そして翌1995年に高久史麿先生を総会長として第1回日本遺伝子治療学会年次集会が開催されました。その後、ご縁があり私は九州大学に赴任させて頂き、第17回日本遺伝子治療学会年次集会を主催させて頂きました。またこの間、浅野先生には、九州大学大学院生教育の一環として夜間講義に毎年お越し頂き、学生達にトランスレーショナルリサーチについて大変熱く語って頂きました。なお別件ではありますが、2008年には浅野先生が中心（常任理事）となられ日本血液学会と日本臨床血液学会が合併され、新たな日本血液学会が発足するとともに、2013年には一般社団法人日本血液学会が設置されました。浅野先生は常にJSGT（現JSGCT）の発展を願い、そしてメンバーの世界における活躍を願ってこられました。JSGCTが法人化に向けて本格的に動き始めたこの時期にご他界されることは、我々は無論のこと、浅野先生ご自身が最も残念がられているのではないかと思います。今でも医科研生協食堂で食事をする際に、カレーライスをほぼ3口で平らげながら、その間に「谷さん、どう、元気？」と3口しゃべって、颯爽と食堂を後にされていた若く活力に満ちた浅野先生のお姿を懐かしく思い出しますと共に、口角泡を飛ばす浅野節をもう二度と拝聴できないことを大変寂しく思います。法人化の暁には、JSGCTが世界からさらに注目されるJSGCTとなりますことを天国から願っておられることと拝察し、浅野先生への追悼文とさせて頂きます（合掌）。

浅野先生を偲んで

熊本大学名誉教授
くまもと江津湖療育医療センター総院長
第18回 JSGT学術集会会長　遠藤 文夫

浅野茂隆先生のご逝去に報に接し心から哀悼の意をささげます。これまで様々ご指導いただき、また、ご厚誼をいただきまして、深く感謝申し上げます。私は小児科学と遺伝性疾患を専門としておりますが、分野違いの私が浅野先生の知己を得ることができましたのは、慈恵会医科大学小児科学教室の衛藤義勝先生からご紹介していただき、遺伝子治療の研究分野での活動を共にさせていただいたことからでございました。当時、すでに浅野先生は臨床血液学分野で大きな業績を上げられ、とくに造血因子関連の研究における世界的な権威であられました。遺伝子治療の勉強を始めたころ、浅野先生が我が国の遺伝子治療の研究をけん引されているご様子を拝見して、この分野の研究が大いに前途有望であると感じました。その後は、ご指導を賜りながら、背中を押されながら学会の役員なども務めさせていただきました。

これまでご指導を頂きましたなかで特に印象に残っていますのは、第9回KSGT学術集会を浅野教授が会長として主宰された折のことです（第9回JSGT学術集会、2003年年7月18-20日・東大弥生講堂）。この会が盛会に無事終了した日の午後、私は浅野先生から東大近くのレストランへお昼の食事に誘われました。次の第10回学術集会を私の恩師であります熊本大学名誉教授の松田一郎先生が担当することになっていました。松田先生はその時すでに大学を退職していましたが、下働きをしております小生への学会の開催にあたっての訓示のような、あるいはさまざま注意をご指導頂いたというのがその食事会の趣旨でありました（第10回JSGT学術集会2004（平成16年8月5-6日・2004）於・一橋教育会館（東京）。当時、小澤敬也先生（第16回JSGT学術集会会長、自治医科大学教授）と現在熊本大学小児科の中村公俊教授（当時講師）と一緒でした。自分が開催したばかりの学術集会を振り返られて、海外からゲストの一人について自分のメインゲストにもかかわらず、講演がなおざりで中身がなかったと厳しくして評価されていました。小生も同様な感想を持っていましたが、浅野先生ご自身が招へいした講師に、そのような評価を明言されたことに、先生の学問への厳しさを目の当たりにしました。学会開催において最も大事なことは学問であるという教えを頂いたと思いました。細かい実務のご指導は小澤先生から十分いただきました。

その後、2012年に第18回JSGT学術集会（平成24年6月28-30日）を熊本で開催させていただきました。この熊本での学会は大阪大学の金田安史先生が理事長に選任された東京での理事会で、新理事長から直接ご指示されてお引き受けした経緯があります。荷が重すぎると思いながらも、浅野先生、衛藤先生から背中を押されましたので、お引き受けさせていただきました。遺伝子細胞治療の世界のレベルを熊本の地で勉強する機会にしたいと考え、浅野先生にも相談に乗っていただきながら準備いたしました。欧州遺伝子治療学会次期会長、米国遺伝子細胞治療学会会長を招聘するとともに、米国、欧州、アジアの俊英を招待することができました。このプログラムついては浅野先生からもお褒めの言葉をいただき大変感激いたしました。

その後、早稲田大学でお目にかかったことが一度ありました。私が関係している代謝関係の小さな集会が早稲田大学で開催され、私は講演に呼ばれたのですが、「遠藤君が来るので出てきたよ」と浅野先生がひょっこり来られて、小児の代謝異常の関する私の講演を聞いて頂きました。大学定年退職後の仕事や生活の話など、いろいろお話を聞かせていただきましたのが最後の思い出です。

遺伝子治療は臨床面で大きく発展しています。私が専門とする遺伝性疾患の分野では進歩が著しく、一部の疾患では遺伝子治療が標準治療になっています。浅野先生が指導されていた長い期間の間には、遺伝性疾患の遺伝子治療において冬の時代もありましたが、先生におかれましては、一貫して強力に我が国のこの分野をけん引されました。その成果として、現在の遺伝子治療の発展があります。浅野茂隆先生のご冥福を心からお祈りいたします。

合掌

浅野茂隆先生を偲んで

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 消化器外科学 教授
第19回 JSGT学術集会会長　藤原 俊義

日本における遺伝子治療のパイオニアである浅野茂隆先生には、長きにわたりご指導いただいてまいりました。遺伝子治療の実用化に向け、折に触れ背中を押していただきましたので、昨年8月12日の訃報をたいへん残念に思います。

浅野先生と初めてお会いしたのは、1995年5月に高久史麿会長のもと、東京大学安田講堂で開催された「第1回日本遺伝子治療学会総会」の時だったと記憶しております。当時、私は岡山大学第一外科で臨床に従事していた30歳代の若輩者でしたが、気軽にお声掛けいただき、遺伝子治療の未来について力強くお話しいただきました。私は米国国立がん研究所のRosenberg博士が始めたがんの遺伝子治療に憧れ、その門下生だったMDアンダーソンがんセンターのElizabeth Grimm博士、Jack Roth博士の研究室での留学を終えて前年帰国したところでした。ただ、当時の岡山大学では、まだ遺伝子治療Gene Therapyについて深くディスカッションできる相手はなく、浅野先生とお話しして初めて言葉が通じた感じがしたのを覚えています。

その後、浅野先生と谷憲三朗先生のGM-CSF遺伝子を用いたがん免疫遺伝子治療の臨床研究が厚生省の承認を受けて開始され、続いて私たちのp53遺伝子治療が承認され治験として岡山大学で始まることになりますが、厚生省や文部省など官庁との対応や現場での安全確保などで本当に多くのご指導をいただきました。また、先生には継続的な資金確保に基づく臨床開発の重要性を教えていただきましたが、バイオベンチャーであるオンコリスバイオファーマの立ち上げと腫瘍融解ウイルス製剤OBP-301（Telomelysin）の開発に繋がっております。東大医科研の病院長を務められ、学会運営も長く携わられた先生は経営的な視点も鋭く、オンコリスバイオファーマの浦田泰生社長とも親しく交流いただきましたことに感謝申し上げます。

私が会長を務めさせていただいた2013年の「第19回日本遺伝子治療学会学術集会」では、安田講堂で浅野先生に力説いただいた遺伝子治療の未来を思い浮かべ、そのまま「遺伝子治療の未来：想像から創造への飛躍」をテーマとさせていただきました。7月の暑い時期でしたので、先生にはカジュアルな様相でご挨拶や座長などの役割もお勤めいただきましたが、それ以外にも会場を精力的に動かれ、先生の周りにはいつも多くの人が集まっていたのをよく覚えております。

遺伝子治療薬が世界で、そして日本で薬事承認されるようになってきた今、浅野先生が思い描かれていた未来にわれわれがいることは間違いないと思います。何事も決断が早かった先生からすれば、時間がかかりすぎたと苦言を呈されるかもしれませんが、この上昇機運を継続することが残された私たちの使命と考えます。これまでの長い間に浅野先生からいただいたご指導と先生が日本の遺伝子治療の発展のために成されたご功績に対し、敬意と感謝の意を表しますとともに、心からのご冥福をお祈り申し上げます。

日本遺伝子治療学会の創生

第20回 JSGT学術集会会長　斎藤　泉

浅野先生の日本遺伝子治療学会の立ち上げからのご尽力を思い残念でなりません。先生は慈恵医大の衛藤先生とともに学会の発足を行いました。遺伝子治療学会のベクターは創世期で多くの人がこの新しい分野に注目が集まっていた時代でした。当時米国の遺伝子治療学会はまだ西と東に別れて未成熟でありその後ようやく統合されたため、日本遺伝子治療学会大会は米国遺伝子治療学会大会により年代が古くなっているなど、全くなにもなくばらばらであった日本の研究をそのパワーで迅速に一つにまとめて日本の遺伝子治療研究の基礎を作りあげた功績は非常に大きいものがあります。ベクターについては日本医大の島田先生のレンチウイルスベクターと並んでアデノベクターの私とで、シンポジウム等で話す機会も多かった頃でした。当時世界的にアデノウイルスベクターを作製できる人はほとんどなく難しいベクターとされており、40代前半の私は多くの先生にこの日本発のベクターを使っていただこうと作製と普及に努めていた頃で、浅野先生にはその力強いバックアップを賜りました。その後東大医科学研究所のベクター施設の立ち上げにも御尽力されておられます。先生方がよくご存知のその豪放磊落な気風と熱意は一貫しておられました。ご冥福を深くお祈り申し上げます。

浅野茂隆先生をしのんで

大阪大学医学系研究科 臨床遺伝治療学
日本遺伝子細胞治療学会 副理事長
第21回 JSGT学術集会会長　森下 竜一

2020年8月12日日本の遺伝子治療の草分けとして、本学会を設立され、長期に理事長を務められ、日本の遺伝子治療の発展に多大な貢献をされてきた浅野先生が永眠されました。ここに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

浅野先生と初めてお会いさせて頂いたのは、東大医科研のシンポジウムではなかったと思いますが、新井先生と御一緒で、ものすごく勢いがある先生だなあというのが第一印象でした。遺伝子治療の将来性を、お二人で機関銃のように話され、トランスレーショナルリサーチ（そのころは橋渡し研究といっておりましたが）、ベンチャーや事業化の重要性などを説かれたのが、強く印象に残っております。まだ、日本では用語すらできていない時代に、先見性のある先生で、遺伝子治療の将来を明るく感じさせていただきました。その後、東大医科研は浅野先生の御尽力で日本の遺伝子治療の最大の拠点となり、トランスレーショナルリサーチの牽引役として今日に至っているわけですが、当時の状況で突破されてきた行動力と洞察力に頭が下がりますし、御苦労も多々あったことかと思います。浅野先生の明るいお人柄ならではと推測しております。

今我々は、新型コロナウイルスに対するDNAワクチンの開発をしていますが、既に承認されたファイザーやモデルナのRNAワクチン、アストラゼネカのアデノウイルスベクターワクチンも、全て遺伝子治療の技術を応用したものです。よもや、パンデミックウイルスに対するワクチンとして遺伝子治療が幅広く実用化されるとは、予想もできませんでしたが、2021年はある意味世界数十億人に遺伝子治療技術が応用される遺伝子治療元年になりました。本来このような時代こそ、浅野先生の御意見・御薫陶に親しく触れたいのですが、残念ながらそれはかないません。本当に残念です。改めて浅野先生の御冥福をお祈りいたします。

浅野茂隆先生を偲んで

東京慈恵会医科大学 副学長
日本遺伝子細胞治療学会 事務局長
第22回 JSGCT学術集会会長　大橋 十也

浅野茂隆先生のご逝去、心よりお悔やみ申し上げます。

私が浅野先生と面識を得たのは、米国での留学を終え帰国した、1992年の事でした。私の聖路加国際病院小児科の後輩である真部淳先生（現北海道大学小児科教授）より、東大医科研に遺伝子治療を研究しているグループがあるので紹介するとの申し出があり、是非、日本でも遺伝子治療の研究を進めたいと思っていた折でしたので、東京大学医科学研究所の浅野先生の研究室を訪問させていただきました。当時は、浅野先生が教授、小澤敬也先生が准教授、谷憲三朗先生が講師だったと記憶しております。東京大学の御高名な

教授に面会するとあって、緊張して伺ったのを記憶しております。実際、教授室にお伺いすると、饅頭を片手に熱弁を振るわれる非常に気さくな先生であり、少し拍子抜けでした。日本の医療・研究体制など、大所高所よりのご指導を受けたのを鮮明に覚えております。その後、慈恵の衞藤先生、大野先生らと伴に日本遺伝子治療研究会を立ち上げ、その後本研究会が母体となって日本遺伝子治療学会の設立となり、折に触れて色々、ご指導頂きました。本学会は米国の遺伝子治療学会に先立ち設立されたもので、現在の遺伝子治療の隆盛を、そのころから予見されていたのでしょう。それ以来学会などでお会いすると、色々声をかけて下さるようになりました。御高名な先生が声をかけてくださるのは、身に余る光栄で、非常に勇気づけられました。浅野先生のお話は、難解な面もありましたが、核心を突くお話が多かったと今更ながら思っております。退官されて早稲田大学に移られた後も何度か研究室にお邪魔してご薫陶を受けました。ここ数年体調を崩されているのは伺っておりましたが、持ち前のパワーで乗り切るものと確信しておりました。一昨年の冬にもお会いして、お元気そうなお姿を拝見し安堵したのが昨日の様です。

その後、新型コロナの流行もあって、直接、お会いすることが困難になり、疎遠になっておりました。昨年夏の突然の、まさに巨星墜つるがごとき訃報に接し私の心は大きな衝撃を受け、悲しみに閉ざされました。浅野先生の先見の通り、遺伝子治療は現在、隆盛を極めようとしております。一方副作用なども報告されるに至り、重大な岐路にたたされたこの時とも言えます。そのような時期に、先覚者ともいうべき浅野先生を失ったことは、誠に惜しみても余りある痛恨の極みでありますが、残された我々が精進致しますので、天国よりお見守りください。

浅野茂隆先生と歩んだ思い出

岡山大学理事・副学長
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 泌尿器病態学教授
第23回 JSGCT学術集会会長　那須 保友

このたび浅野茂隆先生の本学会への多大なご貢献に敬意を表し、本学会日本語版ニュースレターの特集号に歴代大会長ということで寄稿の機会を与えていただきましたこと光栄に存じます。

私自身、20年近く遺伝子治療の基礎研究並びに臨床開発研究に携わってまいりましたが常に浅野茂隆先生のご支援を賜り続けてまいりました。ここにご冥福をお祈りするとともに心より感謝とお礼の気持ちを表したいと存じます。

上司の公文裕巳先生（岡山大学名誉教授）が主催された遺伝子治療関連の多くの会合の運営スタッフの一員として浅野茂隆先生に接することがほとんどでしたが、先生のバイタリティーや親分肌のご気性には自分にはないものを感じ憧れに近い思いを持ちつつ、常に仕事を続ける元気をいただきました。先生は上司の鞄持ちの私にも常に気安くお声をかけてくださるという細やかさを持っておられ、アルコールが入ると益々お元気になれたことを思い出します。

岡山大学が主催もしくは関連した遺伝子治療関連の会合に国内外を問わず積極的に参加くださり盛り上げていただきました。先生のリーダーシップは学術集会は言うに及ばず、懇親会さらには関連したエクスカーションにおいても遺憾なく発揮されました。まだまだ駆け出しの身であった私はこれらの機会を通じて国内外の多くの研究者と知り合いになることができたことは言うまでもありません。その代表的な写真を掲載させていただきますが、ご覧いただければ、詳細な記述よりも確実に岡山大学や私が一緒に歩ませていただいた浅野茂隆先生の在りし日を偲んでいただけるものと確信しております。

1) アジアンスタディ岡山'11
　～アジアから世界へ～（2011年2月18日）

前列右から4人目が浅野茂隆先生。その左が公文裕巳先生（岡山大学）、その右が金田安史先生（大阪大学）

2) 第3回 East Asian Gene Therapy Interest Group
（中国・蘇州　2014年2月13〜15日）

前列右から4人目が浅野茂隆先生。2人目が金田安史先生（大阪大学）。筆者は浅野茂隆先生の後ろ。

懇親会での乾杯の発声をされる浅野茂隆先生

翌日の市内観光：岡山大学のメンバーを引き連れ、サングラス姿で颯爽と歩まれる浅野茂隆先生。迫力とオーラが出ていました。

岡山大学のスタッフとの集合写真。筆者は浅野茂隆先生の後ろ。

改めてご冥福をお祈り申し上げます。

浅野茂隆先生を偲んで

東京大学医科学研究所
日本遺伝子細胞治療学会　理事長
第25回 JSGCT学術集会会長　藤堂 具紀

浅野茂隆先生は、東京大学医学部第三内科に所属する血液内科医で、G-CSFを発見して創薬に繋げ、東京大学医学部第四内科教授に一旦はご就任なさったものの東京大学医科学研究所に戻られて病院長をされ、日本で初めてがんの遺伝子治療を実施されました。私はそのご実績ご高名をかねがね存じておりました。何回かお会いする機会があったかと思いますが、私より17年先輩ですので、尊敬するすごく偉い先生という存在でした。おそらく浅野先生の気さくなお人柄を知るきっかけとなったのは、私がワシントンDCやボストンに在住の頃、米国遺伝子治療学会参加のために毎年のようにご来米されて、その度に食事をご一緒させて頂いたことかと思います。ワシントンDCでは決まってDancing Crabという店にカニを食べに行きました。私はまだウイルス療法研究を始めたばかりの頃で、浅野先生と対面でお話しするのに大変緊張しました。ボストンにいらした際は、浅野先生のノートパソコンが壊れて、その対応に大わらわとなったのを覚えています。

2003年に私が帰国後は、浅野先生と同級で、当時国立国際医療センターの病院長をされていた近藤達也先生と3人で、ときどき食事をしました。近藤先生は私の元上司ですが、浅野先生からは「こんたつ」と呼ばれていました。私が2011年に東京大学医科学研究所に移ってからは、浅野先生からしょっちゅうお電話を頂き、またよくアポ無しでひょっこりと私の部屋に顔を出されたりしました。浅野先生のMSCや病院船の構想を聞かせて頂きましたが、6-7年前からは医療のパラダイムシフトの話も多かったように思います。浅野先生はとにかく頭の切れる先生で、その頭脳の中は、おそらく宇宙のように無限に拡がっており、私のような常人は、お話しに付いていくのがやっとでした。どうせ3年後には死んでしまうのだから、というのが口癖でしたが、構想は常に10年以上先を見据えておられました。電話のときは、数分おきにカチッカチッとライターに火を付ける音がしたものです。銀座6丁目のジャズバーもしばしばご一緒させて頂きましたが、そこでも常に未来の話をされていました。必ず割り勘でした。

サイエンスには厳しい先生でした。米国から一時帰国時に東大医科研の学友会セミナーで私が講演をさせて頂いたときがありました。がん治療用ヘルペスウイルスがどのような機序でがん細胞を殺すのか、という質問が会場からあった際に、私は、ウイルスが宿主細胞のタンパク質合成工場を乗っ取ってしまい・・・などと答えたところ、講演のあとで、あんな答え方ではだめだ、もっと科学的に答えないと、と叱られました。2019年の学術集会では、会長・理事長講演の座長をお務め頂きましたが、浅野先生ご自身にも無理を申し上げて講演をお願いしましたところ、「トランスレーショナル・リサーチでは、今、何をどのように進めるべきか?」というタイトルを頂きました。座長は、先出の近藤先生でした。残念なのは、上野の韻松亭で行った招宴（拡大委員会）にご出席されなかったことです。すっかり日程を忘れていた、とあとで謝られました。

浅野先生とは、東大医科研病院の病床でお会いしたのが最後となりました。ご自身が9年間病院長をお務めになり、浅野先生のお力で建った病院で息をお引き取りになりました。本当にしょっちゅう会話をし、叱咤激励されていた私は、未だに浅野先生ロスの状態です。コロナ禍で延期となっている「お別れの会」を必ずやりたいと思います。

協賛企業一覧

日本遺伝子細胞治療学会（JSGCT）の協賛企業は以下のとおりです。
当会に対するご賛助に深く感謝の意を表します。

〔シルバー〕

サノフィ株式会社　アミカス・セラピューティクス株式会社　JCRファーマ株式会社

〔ブロンズ〕

サレプタ・セラピューティックス株式会社　アンジェス株式会社　石原産業株式会社
味の素バイオファーマサービス 株式会社ジーンデザイン　株式会社ハイマート
ジェンスクリプトジャパン株式会社　タカラバイオ株式会社　アステラス製薬株式会社
株式会社ダイセル　エア・ブラウン株式会社　日本ポール株式会社　ノバルティス ファーマ株式会社

（登録順）

日本遺伝子細胞治療学会（JSGCT）
News Letter - 2021編集局

代表理事　米満 吉和（九州大学大学院薬学研究院）
中神 啓徳（大阪大学大学院医学系研究科）

連 絡 先　JSGCT事務局
〒105-0001 東京都港区虎ノ門5-12-1
虎ノ門ワイコービル5F
株式会社コンベックス内
Tel：03-6432-0272　Fax：03-5425-1605
Email：jsgct@convex.co.jp
URL：http://www.jsgct.jp